

教育行政について、自殺対策についてお伺いします。

大津市のいじめ自殺事件など、全国では、いま、子どもが自ら命を絶つという、痛ましい出来事が相次いでいます。新聞報道によると、小・中・高校生の昨年の自殺者数は 200 人に達したとのことです。

さらに、内閣府の 2012 年版自殺対策白書は、昨年、1 年間に 3 万 651 人が自ら命を絶ち、しかも、若い世代で増加しているという、あまりに痛ましい現実を浮き彫りにしました。

全国で年間 3 万人を超えているのは 14 年連続です。1 日 80 人以上が自殺に追い込まれている社会は異常というほかありません。

本人、家族だけでなく、社会全体にとって放置できない事態です。

「救えるはずの命」が失われない社会を作ることが急がれます。

政府は、若年層の自殺対策を強化する方向ですが、学校現場での自殺予防策は重要です。東京都教育委員会では「子どもの命を守ろう」と題したパンフレットを作成し、自殺予防の取り組みを行っています。本市でも、「どんなことがあっても自らの命を絶たないように」にする、命の重みを学ぶ取り組みが必要です。

本市の取り組み状況についてお示しください。

次にいじめ問題について、お伺いします

8月27日の文教経済委員会に、市内の小・中学校のいじめの認知件数が報告されました。

いま、全国では、大津市の中学生「いじめ」自殺事件など、「いじめ」と自殺が大きな社会問題となっており、この克服へ、教育と社会に大きな課題が突きつけられています。

いま、日本社会には貧困と格差の広がりや、弱肉強食の新自由主義「構造改革」により、カネとモノを最も大切にし、人を大切にしていない風潮が蔓延しています。

「成果」や「効率」で常に評価され、人間らしい労働や、人間らしく生きるための最低限の社会保障制度まで、切り捨てられています。

深刻な「いじめ」問題の根本原因には、子どもを追い立て、追いつめ、ストレスを増幅させる「競争と管理」、選別と切りすての教育政策があります。

今の政策は、子どもが常に比較され、ほめられたり評価されることは少なく、生きていることの意味や値うちが実感できにくい仕組みです。

さらに、子どもを人としてではなく「人材」として扱い、教育の目的を子どもの人間的な成長・発達よりも、大企業に役立つ人材育成に変質化させる動きが強められています。

こうした人間を大切にしない教育政策を抜本的に転換するとともに、1人ひとりの子どもが、本当に人間として大切にされる教育が必要です。

しかし、本市の「学校教育ビジョンⅣ」は、全く違う方向に向かっています。

当ビジョンは、あらゆる教育活動を数値目標化し、目標管理システムを徹底するものです。例えば、「確かな学力を身につけさせる」として、「学力調査結果を活用した授業改善」の現状値と目標値を、数値で表しています。

また、「豊かな心」として、暴力行為や不登校児童生徒率を示し、2016年度の目標値を設定しています。

また、「体力テストの県平均以上」の目標値や、「朝ごはんを食べる児童生徒率」「学習意欲の肯定的評価率」など、あらゆる事柄を数値で示そうとしています。

これらの数値目標を前面に押し出すことは、生徒を人材として扱い、個人の尊厳と教育権を否定し、教職員を道具として扱う方向に流れることが危惧されます。

例えば、全国学力テストの結果が公表されましたが、それについて、市教委は、「課題と改善策を作成し、学校に提示するとともに、各学校を指導する」とのコメントを公表しています。

これを受け、各学校は、学力テスト対策中心の教育活動にならざるを得なくなるのではないのでしょうか。また、「豊かな心」と称して、問題行動をする生徒は、学校から排除したり、別室指導をすることが生徒指導の中心になってしまいます。

数値目標を教育現場に導入することは、その数値を達成させることばかりに目が行き、子どものありのままの姿を見ることが出来なくなります。

教職員が生徒の思いや願いを正面から受け止め、教職員の専門性を発揮し、生徒の可能性を引出し、育てることが、教育本来の営みであり、いじめの克服につながるのではないのでしょうか。

しかし、今のビジョンはそのような観点が欠落しています。

「学校教育ビジョン」の下では、学校側は、「いい学校に見せたい」「いいクラスに見せたい」「問題がないように見せたい」と外見を繕う方向に行きやすくなることが懸念されます。

さらに、失敗なしに子どもの成長・発達はありえないにもかかわらず、本市の「教育委員会点検・評価」システムは、失敗を許さない体制づくりとなっており、子どもと正面から向き合う教育を困難にしています。

また、これらの数値管理は、教職員の多忙化に拍車をかける事にもつながります。

「学校教育ビジョン」と「教育委員会点検・評価システム」を抜本的に見直すことを求めます。

子どもたちの自主性と自治の力を育み、子どもが主人公の学校づくりをすすめ、「いじめ」などを生み出さない、前向きな集団をクラスや学年につくり出していくことが重要です。

そして特に「いじめ」は、子どもの内面と深くかかわる問題であり、子どもたちの本音が通い合わせられる教育を進めていくことです。

そのためには、長時間勤務を解消し、教職員が子どもたちとじっくり向き合い、保護者と力を合わせて課題に立ち向かう環境が必要です。

教職員の長時間労働の解消について、これまでの取り組みと、今後の方針をお示してください。

本市は、少人数学級の取り組みについて、これまでの議会答弁では、「小学校1・2年生は実現している」「35人学級は、国に対して早期実現を強く要望する」とのことですが、市として早急に実現するために取り組みを強めることを求めます。

文部科学省は、来年度、小学校3年生以上も「35人学級」を実現するための予算要求をしていることが、報じられています。

都道府県の判断で、対象学年を選べるようにする、とのことですが、この制度も活用し、早急に35人学級を実現することを求めます。

ご所見をお示してください。

以上について、お答えください。